

勘定は親指の爪に書け

——ソローのトール・トーク——

佐藤光重

序

ヘンリー・ソローのユーモアで特徴的な手法のひとつは誇張法である。菜食主義者で知られる彼は、野菜だけでよく生きていきますね、と言われると、「釘を食べたって生きていけるよ (I can live on board nails)」と答えたものであった (117-18)¹。確かにソローはアイルランド移民の鉄道工夫から古小屋を買い取り、解体して手にした板と釘とで自身の小屋を新築した。人ひとり生きて行くには最低限度のもので事足りるとの趣旨ではあろう。だが、だからといってこの冗談を真に受ける者などいまい。菜食主義のどこが悪いのだ、とばかりに大げさに意地を張っているのは明らかであり、物言いが極端なところが可笑しい。

同様の大仰な言いぐさといえは、『ウォールデン』第4章「音」で、地元の産物である魚の塩漬け (cured fish) の自慢話がある (218-19)。ここでは「塩漬け」と「治療・解決」(cure) の地口が利かせてあるばかりでなく、「聖者の信心も顔負けの (putting the perseverance of the saints to the blush)」堅物ぶりが誇張してあって面白い。塩漬けはとても頑丈で、「ひとはそれを使って、道路を掃いたり、舗装したり、焚きつけを割ったりする (with which you may sweep or pave the streets, and split your kindlings)」こともでき、「御者はその陰に隠れて、太陽や風や雨からわが身と積み荷を

守ることもできる (the teamster [may] shelter himself and his landing against sun wind and rain behind it)」という (218)。さらには、商家はそれを吊るして看板にもでき、そのうち客のほうでは動物なのか植物なのか、鉾物なのか見分けがつかなくなっても、ひとたび鍋に入れればすばらしい食材となり、週末の食卓を賑わす (219)。

生まれ持った性格が矯正されにくいことの喩えでもある塩漬けだが、いくら「堅物」といえども道路を舗装したり焚きつけを割ったりなどするはずがない。この大げさな物言いは、実のところ単なる誇張法で片づけるべきものではない。この表現にはアメリカ文学に特徴的なある話法の風情がある。すなわち、トール・テールの趣である。本稿は、ソローのユーモアにおけるトール・テールの要素を指摘し、そのことを通じてアメリカ文学における南西部/東部といった地方色の通念を再検討するものである。

1. トール・テール研究史

トール・テールおよびトール・トークの代表的な研究の系譜は、1930年代に始まる (Schmitz 472-73)。アメリカン・ユーモア研究のうちでも、コンスタンス・ルアク『アメリカン・ユーモア』(Constance Rourke, *American Humor: A Study of the National Character*, 1931) やウォルター・ブレア『生粋のアメリカン・ユーモア』(Walter Blair, *Native American Humor*, 1937) らが、トール・テールを研究対象までに押し上げた嚆矢とされる。

以降はトール・トークの技巧を分析し、さらにはトール・トークに潜む政治的側面にも注目が集まる (同上)。たとえば1959年、ケネス・リン『マーク・トゥエインと南西部のユーモア』(Kenneth S. Lynn, *Mark Twain and Southwestern Humor*) は、トール・トークの話者トゥエインに、ジャクソン民主主義下から巧みに距離を置こうとするホイッグ党 (共和党の前

身) 的な感性を見出した(同上)。その後、1975年、ジェイムズ・コックス (James M. Cox) は、言語が自然・本性 (nature) を探求する側面にトール・テールの真髄を認めた。トウェインがユーモア論にしてトール・テールでもある「物語の伝え方」(“How to Tell a Story”) で示したように、トール・テールとは内容 (matter) そのものより、様式 (manner)、すなわちトール・トークにその本質があるとされる(同上)。

シュミッツに続いて1987年にはキャロリン・ブラウン『アメリカ民話と文学におけるトール・テール』(Carolyn S. Brown, *The Tall Tale in American Folklore and Literature*) がトール・テールの様式を、テキストのみならず話者、ひいては共同体との関係において論じた。これを踏まえ本論はソローのトール・トーク話法のみならず、とりわけ語り手と共同体との関係性においてソローとトール・テールとの接点を求めるものである。

2. 南西部の話者、東部の聞き手

ソローがウォールデン湖畔に移り住んだのは1845年のことで、『ウォールデン』の出版は54年である。この頃は、アメリカ南西部で生まれた、いわゆるトール・テールの全盛期であった。トール・テール全盛期は、1831年から60年とされる(Brown 3)。そのわけは、トール・テール演劇の先駆け、ジェイムズ・ポールディング『西部の獅子』(James Paulding, *The Lion of the West*) の初演が1831年であり、同年にトール・テール最大の媒体、ウィリアム・ポーター編集の週刊誌『時代精神』(William Porter, *Spirit of the Times*) がニューヨークで創刊になるからである(同上)。全盛期に幕を引くのは、むしろ1861年から始まる南北戦争であり、この年にアメリカ南北間の郵便が不通となり、配達不能となった『時代精神』の発行が途絶える(同上)。『ウォールデン』が執筆されたのはこの全盛期であ

り、ソローは誇張法を、トール・テール全盛期に用いたことになる。

アメリカ文学の地方色から言って、一般にはトール・テール話者は南西部、ヤンキー・ペドラー (Yankee Peddler) は東部と相場は決まっている。ユーモア文学のアンソロジーは、アメリカ東部のユーモア文学にトール・テールを含めない。実際、トール・テールのヒーロー、かのデイヴィー・クロケットやマイク・フィンクらは南西部の開拓地を舞台に話を繰り広げる。やがてアメリカン・ユーモア文学の傑作、トウエイン『艱難辛苦を乗り越えて』 (*Roughing It*) を生み出すのもなるほど開拓地である。

しかし、トウエインとて、南部が生み出した才能を東部で買われたのは事実である。トール・テールが生まれたのはむしろ南西部、当時の開拓地であるが、活字媒体を通してのトール・テール最大の消費地は、東部であった。トール・テールが新聞紙上を賑わすのは 1830 年代から 60 年代にかけてのことであり、ブラウンの指摘では、1850 年代までには、アメリカ南北を問わずトール・テールは流布していたという (3-4)。その証左となるのはアンソロジーの発刊である。南西部のトール・テールはポーターや南部作家はむしろ、カナダ南東部、ノバスコシアのユーモア作家トマス・ハリバートン (Thomas Haliburton) がアメリカン・ユーモア文学集 (*Traits of American Humor*, 3vols. 1852/ *The Americans at Home*, 2 vols. 1854) を編み、同アンソロジーはフィラデルフィアおよびロンドンでも出版された (Brown 3, 140 n.8)。ソローが『ウォールデン』を書いたころ、トール・テールは南西部で産声を上げて久しく、すでに東部、南西部を問わず、アメリカ人が共有する国民的ユーモアへと成熟していたのである。

トール・テールの資料は、東部が発行する新聞や雑誌が宝庫である。一例として、民話研究家 C. グラント・ルーミス (C. Grant Loomis) が 1947 年、民話研究誌 (*Western Folklore*) に発表したトール・テール拾遺集 (“A Tall Tale Miscellany, 1830-1866”) が挙げられる。ルーミスはトール・テ

ルを狩猟と漁、動物、腕自慢、天候、発明、巨大化、自然、資源、移動手段、人柄、と計 10 ジャンルに分類して 57 話を掲載した。これらの出典には 1830 年から 60 年代までの東部の新聞・雑誌が連なる。たとえば『デイリー・イヴニング・トランスクリプト』(*Daily Evening Transcript*)、『ヤンキー・ブレイド』(*Yankee Blade*)、『ヘラルド』(*Herald*)、はいずれもボストン誌・紙である。『ウィルクスの時代精神』(*Wilkes' Spirit of the Times*) はポーター『時代精神』と同じくニューヨーク誌である。その他、『ヤンキーの見解』(*Yankee Notions*)、『ニッカボッカ・マガジン』(*Knickerbocker Magazine*)、などもタイトルからして東部の出版物と見てよかろう。ロバート・トマス『老農夫の暦』(*Robert Thomas, The Old Farmer's Almanack*) からの引用もあり、これはかのフランクリン『貧しいリチャードの暦』(*Poor Richard's Almanack*) の衣鉢を継ぐ、東部伝統の(タイトル「オールド」には「昔ながらの」の意も含まれよう)庶民の娯楽読み物である。

物語の構造自体も、中西部から東部へとトール・テールが生産、消費される構図を内在する。前述トマス・ハリバートンのアンソロジー所収になる「わな猟師の話」(“The Trapper's Story”)は、トール・テールに典型的な枠物語 (frame narrative) である。そこで語り手の猟師は、焚火の近くに旅人を招いて話を始めるスタイルを取る。枠物語において読者は、ちょうど焚火にあたりながら猟師の話を聞く人々と同化する仕組みになる。「わな猟師の話」で興味深いことに、話中の聞き手たちはアメリカ東部、ボストンの人々なのである (Brown 65)。ハリバートンがこの話をアンソロジーに収めた 1854 年までには、確実に文学におけるトール・テールはアメリカ人にすでに親しまれており、わな猟師と焚火とは、トール・テールお決まりの場面設定となっていた (同上)。

東部の作家 (というより世界を股にかけた作家というべきであろう)、かのメルヴィルは、のちにユーモア文学アンソロジーに載るトール・テ

ルの名作 (“Cock-A-Doodle-Do! or the Crowing of the Noble Cock Beneventano”、
や *Israel Potter* の一章 “Israel is Initiated into the Mysteries of Lodging” など)
を遺したが、彼は出版物を通してばかりでなく、グジラ漁の世界で船員話
(sailor’s yarns) を熟知していた。トール・テール文学との接点では人気を
誇った『時代精神』はむろん読んだことがあったろうし、『船員生活と船
員話』(Captain Ringbolt, *Sailors’ Lives and Sailors’ Yarns*, New York, 1847) には
書評を寄せ、短命に終わったユーモア誌『ヤンキー・ドゥードゥル』
(*Yankee Doodle*) には寄稿さえしていたことも分かっている (Grobman 20-
21)。

トール・テールの定番、巨人の樵ポール・バニヤン伝説も、中西部ばかり
でなくメイン州も舞台である。そもそも巨人の生まれがカナダとの国境
地区なのである²。時代は下って 20 世紀にも作家ジョン・ゲールド『農
夫、妻を娶る』(John Gould, *Farmer Takes a Wife*, 1945) なるトール・テール
小説が生まれている。同書の書評も、ゲールドが東部のユーモアの伝統に
根差した傑作である、と解する (Pulsifer 271)。

3. ソローのユーモア

アメリカン・ユーモアの系譜でソローが扱われることはまずなさそうで
ある。アメリカン・ユーモア研究の集大成といえば前述ウォルター・ブレ
ア『生粋のアメリカン・ユーモア』(1937) が嚆矢となろう。同書によ
ると、アメリカン・ユーモアの系譜は、独立革命以後、フロンティアの拡大
に伴って中心地が辺境地へと移ってゆく。したがってアメリカ東部 13 州
の植民地時代はまず除外され、フロンティアが拡大する 1830 年から 1867
年までが開花期となる。東部のユーモア作家としてブレアは、民衆の流布
本『農夫の暦』(*The Farmer’s Almanac*) にはじまり、セバ・スミス (Seba

Smith)、トマス・チャンドラー・ハリバートン (Thomas Chandler Haliburton)、ジェイムズ・ラッセル・ローウェル (James Russell Lowell)、ベンジャミン・シラバー (Benjamin P. Shillaber)、フランシス・ホイッチャー (Frances M. Whitcher) といった面々を扱う。このうち、今日の文学史に名前が残るのはローウェルくらいであろう。だがローウェルら、いわゆるコネティカット・ウィッツすら今日にインパクトを遺す流派ではなく、かつて隆盛を見た一派として扱われるのがせいぜいである。しかも、トール・テールの範疇にこれらの東部の作家は含まれない。

ブレアがトール・テールを扱うのは、東部のユーモアが花咲くのと同時期、1830年から1867年までのアメリカ南西部のユーモア文学である。ここにはかのデイヴィー・クロケットやマイク・フィンクらが登場し、いかにも開拓地のユーモアの主人公らが揃う。

ソローは一義的にユーモア作家と呼ぶことはできないのであろう。ユーモア文学のアンソロジーでは、アメリカ東部のユーモア作家に挙がるのは『貧しいリチャードの暦』のフランクリン、『ビッグロー・ペイパー』(Biglow Papers) の作者ローウェルである。アンソロジー³によっては、ワシントン・アーヴィング、ポー、ホーソーン、メルヴィルの名まで挙がることはあるが、ソローはまずお目にかかれない。しかもソローは、ローウェルが直にユーモアのない作家と断じたほどである。

そのため、ソローにおけるユーモアの研究は、まずローウェルを反駁することに始まった。ソローのユーモアに関する言及は散発的にさまざまな著作で見つかるが、集大成的な論考は、チャールズ・グルネルトの博士論文 (Charles Gruenert, *Thoreau's Humor in Theory and Practice*, 1957) と、全91頁からなるJ. ゴールデン・テイラーのモノグラフ (J. Golden Taylor, *Neighbor Thoreau's Critical Humor*, 1958) の両論である。

グルネルトは、ソローのユーモアを理論化することを試みた。エマソン

のエッセー「コミック」(“Comic”)に影響を受けたソローが、いかに独自のユーモア論を展開したか探るべく、ソロー「カーライル論」との比較を行う。分析的な知識をつかさどる悟性(Understanding)と、総合的な知恵である理性(Reason)との仲立ちを務めるのは想像力(Imagination)と超絶論者は言う。だが、ソローの見方では、ユーモアが時に想像力と同じ機能を果たす、という(44-55)。

日本でも、この成果に触発され、絳川羔がソローのユーモアを紹介する小論をいくつか発表した。しかし、同論は、ユーモラスな箇所の紹介に留まり、ユーモア論はさほど試みていない。

とはいえ本国アメリカも、ソローのユーモア論を徹底検証した論文は、1972年、ジャネット・ハルバートの修士論文(Janet Claire Mason Halbert, “Humor in *Walden*”)以降、目立った進展はなさそうである。

4. ソローのトール・トーク

これらソローのユーモア論にはひとつの限界がある。ソローのユーモアを社会批判と見做すものもあれば(テイラー)、ソローの文学理論を体現する表現形式とみるもの(グルネルト)、などあり、いずれもソローのユーモアの特質に控えめな表現(Understatement)と誇張法(Hyperbole)とがあることを指摘しはする。だが、ピューリタニズム、または超絶主義、もしくはローウェルら東部のユーモア作家に比較するなり、系統づける点で異ならず、ソローのユーモアは東部の粋を出るものではないと解釈される。グルネルトは結論の一部でソローの誇張法をトール・テールに比較するが、ユーモア自体は手段であって目的でなく、あくまで主張する事柄を例証するエピソードに使われる程度にすぎず、方言を活かして書かれたわけでもない、との諸点から、トール・テールとは異なるものと結んで

いる。

トール・テールに限定しないならば、ソローのユーモアに関する論考は充実していると見てよかろう。だが、彼のユーモアがアメリカ東部特有のものなのか、それとも広くアメリカ的なものなのかを位置づける論考は欠ける。まして、ソローのトール・トークという観点はこれまで論じられてこなかったのではないか。

たしかに、ソローの文体にトール・トークの特質を認めるにはひとつの欠点がある。ローウェルやトウエインと違い、ソローは口語で文学を著さなかった点である。『ウォールデン』第3章「読書」に明らかな通り、東西の古典、聖典の訓古注釈に分け入ることこそが本当の読書であり、古典の言葉は母語ならぬ「父の言葉」(father tongue)であると述べたほどの著者である(182)。その意味は、母語が生まれながらに備わる言語であるのに対し、父の言葉は、神のこぼれを授かるのに似て、それを会得するために人は生まれ変わらなくてはならないものなのだという。こうした考えの持ち主にとって、まもなくアメリカに口語文学の傑作『ハックルベリー・フィンの冒険』が誕生することは想定外であったろう。

しかし、それだけで、ソローをトール・テールの伝統と切り離してしまうのは性急である。文語調でありながら、ソローの誇張法には、規格外の(ソローの言い方を借りるならば“*extra-vagant*”)な迫力がある。とりわけ、『ウォールデン』前半の章は、社会批評の色が濃いものであり、辛口で大仰な語り口が冴える。ソローの言っていることは立派なのだけれども鼻につく、正義感で文学は語れない、などと批判する向きは、ソローの言葉を真に受けすぎているきらいがある。立派に聞こえて実は何食わぬ顔をして冗談を飛ばしているのである。そこで『ウォールデン』前半の諸章「経済」「住んだ場所と住んだ目的」(以下「住んだ場所」)「音」「孤独」などからソローのトール・トークを抽出し、『ウォールデン』のトール・

テールの側面を浮き彫りにしたい。

『ウォールデン』冒頭「経済」の章において、語り手は随所で読者に文字通りの意味と比喩的な意味との二重の読みを要求する。マイケル・ウェスト (Michael West) によると、たとえばソローが「日の出に立ち会う (assisted the sun)」(36) とは文字通りの意味と、王様に謁見する (the levee of le roi *soleil*) ことの比喩とが重ねてある、という (92-93)。さらには、全財産 (Capital) と頭 (*caput*) とが掛けてあり、冬の野原を逍遙して自然の声を世間に知らせるためには、「全財産を投げ出した (sunk all my capital)」(36)、とあるのも、寒風に頭をさらして (sunk his head into a chilly wind) 歩きまわることも含意する (West 93)。さらには「空が落ちてくるのを待ち構えた (waiting at evening . . . for the sky to fall)」(36) とは夜 (nightfall) の言葉遊びである。明け方まで寒空をうろついて「得た」(catch) ものは、「日にさらされるとマナのように溶けてなくなった」、というと神秘的なニュアンスだが、他方で夜通し歩いて風邪を引いた (catch a cold) との意味にも読めるのだという (West 93)。

人の顧みない自然の風物を愛する、詩的生活の美しさを描いているようで、世に顧みられない自分を嘲笑してもいる。ソローは、「めったにひとが訪れない農場のすみずみまで」目が行き届き、コケモモ、エノキ、マツ、トネリコ、スミレなどに「水をやった」、さもなければ乾季にはみんな枯れていたろう、と記した (37)。この箇所も、ウェストの解釈では、ソローが人目を避けて用を足した、とのジョークが仕掛けてあるのだという。逍遙しながら小用したというわけである (West 93)。

ウェストの指摘する例には、語源にまつわる地口 (pan) が多い。同様の例は、なるほど気を付ければ『ウォールデン』の名言にも見つかる。私たちの生活は無数の雑事に患われすぎるのだ、と非難してソローは、正直な人間ならば「十本の手の指より多くを数える必要はない (hardly need to

count more than ten fingers)』と述べた(164-65)。これは、直後に、「なにごとにも簡素に、簡素に、簡素に (Simplicity, simplicity, simplicity! I say)』(165)と続く有名な箇所である。日本語でも十指に余る、との謂いもあるが、ここはやはり語源にまつわる地口が潜む。文脈は、人々が生きる本質とは別の事柄にかまけていながら、それをビジネスと称して、忙しいと不満をかこつことを非難するものである。ここでビジネスの語源を紐解けば、もとは古英語“*bisignis*”から来ており、語源は「忙しい (busy)」と同根である。ばかりか、busyの語源は“*bisig*”「手がふさがっている」の意味であるらしい。すると、十本の指より多くのことをするから、手がふさがる、すなわち忙しい、との地口が読み取れよう。

町のひとびとは忙しさを口にするが、他方でソローは世に入れられない、または世間に出ようとしない。そのような主人公からすれば、世間の人々の忙しい素振りには負け惜しみも言いたくなるのであろう。憎まれ口もユーモラスな場合がある。なぜこうもせわしくなく、人生を浪費するのか、仕事といったところで、重要な仕事など本当のところ何もない。その証拠に、寺の半鐘を鳴らして火事の知らせを出して見れば、「朝のうちは仕事が忙しいなどと、くどくど言いわけをしていた」人々が、「なにもかもほっぽり出し、(中略) 駆けつけてくるだろう」(167-68)などと非難するのはなかなか傑作である。しかも駆けつける動機は、家財道具を運びだしてやろうとのことではなく、野次馬根性であり、さもなくば火消しに手を貸して英雄にでもなりたい魂胆だという(同上)。ここだけでも辛辣だが、付け加えて、「そう、たとえ燃えているのが教区の教会であろうと」(168)とある。まるで、教会などどうでもよい建物だといわんばかりの憎まれ口であろう。

それにしても、ソローのユーモアに、かなりの誇張が含まれていることは注目に値する。先ほどの寺の鐘のエピソードにしても、前置きは大げさ

である。ひとはなぜこうも急いで人生を浪費するのか、とソローは問いかけ、「腹も減らないうちから餓死の心配をし (We are determined to be starved before we are hungry)」、転ばぬ先のつえ (a stitch in time saves nine) とばかりに「明日の九針を省くため今日に千針縫う (so they take a thousand stitches to-day to save nine to-morrow)」(167)。重要な仕事など実は一つもなく、そのくせ「舞踏病のように慌てふためいている (We have the Saint Vitus' dance, and cannot possibly keep our heads still)」(60-61)。英語では「落ち着いている (keep one's head)」と、踊りで頭が揺れている様子とが掛けてある。落ち着きがない現代人は病いだ、しかも難病だと言いたいのであろう。

だが、ソローのユーモアを論じるこれまでの論考には、この特徴に関してあまり注目していない。せいぜいのところ、先ほど言及した批評家ウェストが、ソローの空威張り (boasting) にはユーモアがあり、トール・テールと比較するとユーモアが浮き彫りになる、とする指摘が唯一のものではなかろうか (95)。

ソローは鉄道がニューイングランドに敷設され始めた頃に執筆した。鉄道にまつわる言及は意外に多いのである。なかんずく、鉄道旅行については辛辣な言葉を残した。徒歩での旅行とは違い、鉄道には運賃が必要である。旅費を稼ぐために旅行はしばらく先延ばしにしなければならない。しかし、ソローの言うには、思い立ったが吉日で、旅費を稼いだ頃に旅に行かれるか、行く気になるかは不確かだし、なにより旅費を稼いでいるあいだ自分が無事に生きながらえているか保障はない、と述べる。ほかの人が旅費を稼ぐため働いている間に、自分は徒歩でとうに目的地に到着し、旅を楽しみ帰ってくる、鉄道が世界一周をしても自分のほうが先に目的地に着く (if the railroad reached round the world, I think that I should keep ahead of you)、と豪語する (98)。

これも大仰なトール・トークであるが、西部のトール・テールとは違って徹頭徹尾が荒唐無稽ではない。盗人にも三分の理、一部は理に合うところが味噌である。旅は行かれる時に行け、行かれるうちに行け、との主張である。美術品、古書、骨董と同じく、どうしても金銭的に入手できないならともかく（金銭がなくても怯まないのは真の愛好家であるが）、いま手に入れなければ今度また出会える保証はない。旅の機会もまた同じである。地震、噴火、台風などの天災、政争、経済危機はいつやってくるかわからず、やってくれば長期にわたって旅の機会が失われる場合もある。世の中が平安でも、仕事の日程、体調の変化、老化、精神状態の変調など様々な悪条件がありうる。体調、日程、家計、天候、世の中の状況など諸条件が整わなければ出かけることはできない。

人生でも旅を味わえる年齢は働き盛りの頃と重なる。定年後を待っていても、その頃の自分はどのような体調であろうか分かったものではない。多くは出かけるのさえ加齢とともに億劫になる。食欲もさして湧かない。行かれる時期は意外に短く、出かけられる機会は思いのほか希少である。だから、金銭の心配は二の次にして、旅は行かれる時に行け、とソローは言うのである（98-99）。

自嘲気味のユーモアも「経済」の章には著しい。冒頭からして自ら生活の貧しさ、名の無さ、頼りなさを嘲る。ウォールデン湖のほとりで小屋を建て、「手を使った労働だけで生活の糧を得ていた（*earned my living by the labor of my hands only*）」とある（9）。これを、アダム・スミスのいう「神の見えざる手（*invisible hand*）」のパロディーだとする解釈はかなりソローに好意的である⁴。自由経済、重商主義、私的利益の追求を正当化すべく引き合いに出す「見えざる手」に対し、自らの手で生きるとは、市場経済に背を向ける生き方を示す、とすればなるほど雄々しい。しかし、自分を奇異と好奇の目で見る聴衆を前に語った講演に発する「経済」は、そ

のように見られる自分をからかう余裕を見せ、なかなか愛嬌のある説教でもある。

というのも、「手による労働」とはいくつかの意味で自嘲的なユーモアだからである。冒頭の句に「これから続くページ、もしくはその大部分を書いている間」とある通り、語り手は自分の執筆生活について話を始めているのだから、著作だけに、手による労働とはいわずもがな、当たり前のことを言っているのである。とぼけた物言いである。

もう一つには、まるで「筆一本で生計を立てている」との豪語にも聞こえるのが可笑しい。なにしろ、ご当人がなにより承知の通り、自著はとんと売れる見込みなどない貧者である。自分の職業には秘密が多いが、職業柄いたしかたのないことである (there are more secrets in my trade than in most men's, and yet not voluntarily kept, but inseparable from its very nature) (34) とあるのも、彼の職業 (ここでは執筆業を指す) は、あまり世間の耳目を惹かない、だから世間から知られない、いたしかたなく秘密のようになってしまう、との皮肉であろう。筆一本では生きられないから、ただいま講演をしており、その他、万の仕事を請け負うのである。

さらには、いかにも人に頼らず生活しているかに聞こえるのも、見え透いた嘘であり、一種のほら話 (hoax) ともいえよう。小屋を建てた土地はエマソンの所有地、たまに母やエマソンの妻に夕食をごちそうになったのであるから。結局、母のいいつけ通り、いまだにコーヒーも気兼ねして飲めず、親に依存せざるを得ない彼は、その情けなさをいかんともし難く、ゆえに語り口調も自嘲気味になるのであろう。

名言「なにごとにも簡素に、簡素に、簡素に (Simplicity, simplicity, simplicity!)」(165)、に続く、簡素化の度合いは極端なものである。なにしろ、自分の問題は二つか、三つでよく、百とか千も要らない (同上)、などというが、さすがに忙しさをかこつ者でも百や千もの用事などなかる

う。同様に「百万数えるかわりに六 (half a dozen) まで数え、勘定は親指の爪に」書き付けておけばよい (同上)、と豪語する。親指の爪 (thumb nail) とはこれまた名詞「小さなもの」、動詞「略記する」の意味の地口でもあるが、量の多寡が極端なことに違いはない。食事さえ、「百皿食べるかわりに五皿に」し、その他もこの割合でいけばよい (同上)、という。

住居とはとどのつまり腰を下ろすところと「住んだ場所」の章で著者は述べる。そこで小一時間ばかり風景を堪能する。この小一時間で主人公は春と夏を過ごし、「またたく間に幾年かをやりすごし、冬をしのぎ、春を迎え入れ (let the years run off, buffet the winter through, and see the spring come in)」(144) たとある。リップ・ヴァン・ウィンクルさながらの描写だが、このもの言いも、一種のツール・トークではなかろうか。著者の想像力とはどまることなく、ついにいくつかの農場の「先買権」(refusal) をもつところまでいったという。英語の先買権には「拒絶」の意味もあるから、素性のよく分からない妙な人間だと農家から拒絶されたいことへの自虐的なユーモアを籠めてある。が、それ以上に、文字通りの売買ではなく、想像上の出来事が誇大妄想と化す様子が可笑しい。

文字通りの日常的な目覚めと精神的なそれとを対照的に論じつつ、真の意味の目覚め、すなわち「眠りについたときよりも高い生活に向かって目覚める (awakened . . . to a higher life than we fell asleep from)」(160) ことが、「住んだ場所」の章が説く、真の意味で生きることである。「朝とは私が目覚めている時間のことであり、夜明けは私の内部にある (Morning is when I am awake and there is a dawn in me)」(161) との名言もこれを指す。この意味に取るとしても、つづいてソローが、知性的に目覚めているものなど「百万人にひとり」しかおらず、神聖な、詩的な生活を送るほど目覚めたものは「一億人にひとり」ぐらい、との言い方も、なるほど真理を表しているがケタは大きい。誇張はついに全否定に向かってゆき、語り手は

やがて「ほんとうに目覚めている人間には出会ったことが (I have never yet met a man who was quite awake)」なく、「目覚めていることこそ生きていくことにほかならない (To be awake is to be alive)」と断言するに至る(同上)。大仰だが小気味よく、まったくの放言ではなく、誇張して記憶に残すに足る真理が含まれる。

この論法でいくと、人間は真の意味で生きているものなどほとんどおらず、「人生に絶望している (despaired of life)」(160) こととなる。町の人々の生活は忙しい。当時の生活を激変させた要因は産業の機械化であり、鉄道、電信、の発達である。鉄道にも電信にもソローはいたって辛口であり、およそ文明の利器でひとは賢くならない、との信念がある。アメリカ人の生き方はあまりに性急であり、「電信で語りあい、時速三十マイルで走らなくてはならない」とでも主張しているかのようなのであるが、人間が「ヒト」らしく生きるか、「ヒヒ」(baboons) のように生きているか確信がない(166)。家において各自が「余計な事をしない (mind your own business)」なら、だれが鉄道など欲しがらるだろう。鉄道に我々が乗るのでなく、「枕木 (sleepers)」のように目覚めぬ人々は実際のところ線路に敷かれているのだ(166)、とは米国流「見事な啖呵」(marvelous swelling) の好例であろう。

メディアを通じてニュースやゴシップを追うのは今日の我々も当時のアメリカ人も変わらない。しかしソローのツール・トークによれば、船が難破しただの、汽船が爆発したなどという記事は一度読めばたくさん(166)だと言う。海外のニュースにしても、「少し気のきいた人間であれば、十二カ月前、いや十二年前でも、かなり正確な記事が書ける」くらい、世の中は本質的に変わっておらず、イギリスを例に取るならば「あの国から届いた最近の重大ニュースは、一六四九年の清教徒革命くらいなもの」で、「フランス革命も含めて、外国ではなにひとつ新しい事件は起こっていな

い」に等しい、と言っただけ (170)。

つづく「音」の章では、機械化され都市化するアメリカ社会で、規則的な生活により身動きがとれない有様を誇張して語る。「私はあるとき、それ[鉄道]がひき起こした奇跡をまのあたりにしてびっくりした」とあるのは、のんびり暮らしていたボストンの人間が、発車ベルが鳴る頃には「ちゃんとそこへ来ていた」ことに対してである (214-15)。アメリカ人は「決して進路を変えることのない運命の女神 (中略) をつくりあげてしまった」とは、定刻で動く鉄道のことである (215)。人間は鉄道のおかげでかえって方向の定まった生活を送っており、「われわれはみな、ヴィルヘルム・テルの息子になるよう教育されている (We are all educated thus to be sons of Tell)」という (215)。「空中には見えない矢が満ち (The air is full of invisible bolts)」、一歩でも道を踏み外すことは許されない (同上)。だから運命の矢にあたって死んでしまわないよう、ひたすら「軌道」(track) を歩くがよい、と吐き捨てる (同上)。

規則通りの無味な生き方を「軌道」(track) になぞらえるこの結びには伏線がある。ソローはいつも村へでかけるとき、近隣を走るフィッチバーグ鉄道の築堤を通った (209)。「いわばこの連結路によって社会とつながっている (related to society by this link)」ので、貨物列車の乗務員などまるで昔からの顔なじみのように、ソローに向かって頭をさげていった (同上)。実際、あまり頻繁に出会うので鉄道関係者と見間違えられていたらしいのである。ソローは続けて、いや、事実そのとおり、自分は「地球の軌道のどこかで鉄道の修理をやりたいと思っている (I too would fain be a track-repairer somewhere in the orbit of the earth)」と豪語する (216)。軌道には鉄道と地球のそれ (orbit<orbita ラテン語で「軌道」) との両義があり、自分は規則にしばられた生き方を変えてみせる、との意気込みを、壮大に宣言している。

「孤独」の章で、独居するソローにひとはよく、「さぞさびしいでしょうね」と問いかけた、とある（239）。これに対する返答などは宇宙規模である。返答は、「われらの住む地球にしたところで宇宙のほんの一点に過ぎ」ず、地球は銀河のなかにある、二人の間を隔てる距離とはどんな距離なのか、「われわれのいる地球からして、銀河にうかぶ孤独な星にすぎない」（同上）、という大げさな譬えである。強がりもここまできると憎々しげではないか。

結

ソローは人間嫌いだったと一般には思われている。兄を失い、恋い慕った人は去り、傷心を慰めるべく湖畔を訪れると、焚火が燃え移り百エーカーもの山火事を起こしてしまった。村八分である。そのようなとき、彼はウォールデン湖畔に小屋を建てた。人付き合いは極力避けていたようにも見える。『ウォールデン』でも「孤独」と題した章までである。

確かに付き合いにくい人ではあったらしい。恩師にして友人のエマソンは、ソローへの悼辞に、ソローの友人の言葉を引いた。曰く、「ヘンリーのことは愛しているが（中略）、どうも好きになれない（I love Henry, . . . but I cannot like him）」と（Emerson 578）。なかなかの名言である。この言葉は、「ソローと腕を組んで歩いていても、なんだか榆の枝と手を組んでいる気がしてくる」、と続く（同上）。この愛憎なかばする悼辞にも窺われるように、ソローは決して交際のまったくできない人間ではなかった。むしろ、強烈な癖はあっても憎めない愛嬌のある人柄であった。あるときは「社会こそ救いようのない集団」（305）であるとか、本当に人が住みたい場所は酒場の近くでもなければ郵便局の上でもない（240）などと交際を否定する言辞を弄するが、『ウォールデン』には、ソローが読者を仲間

として手を差し伸べた形跡が散見される。それは決して、たとえば「音」の章で、終電の汽笛と走行音が消えた後、フクロウの鳴き声を聞いて無性に暗く悲しい気分になった（224-27）、と述べたことにあるのではない。ソローが交際の手を差し伸べるのは、彼が大げさな物言いで社会を痛罵するときなのである。

「住んだ場所」に「わたしは根っからの話し好き」（143）とあるし、「訪問者」の章にも、世捨て人では決してなく、交際を愛する人間であり、「事と次第によっては酒場へ出かけて行って、したたかな常連客より長くねばることだってできるだろう」（251）ともある。酒場といえば、当時のアメリカ人がトール・テールを交わす典型的な場所である。酒場談義でも著者は引けを取らないとも見てとれる文言である。

トール・テールとは、酒場や蒸気船客室などで賑やかに交わされる会話が生み出し、育んだものなので、それを定義するのも単にテキストの構造のみで説明しえるものではない。話者のリズム、イントネーション、間合いの取り方など、聞き手の反応を見ながら語るものであるから当然、話者と聞き手との関係性も定義に関わる（Wonham 288-94）。

まずトール・テールとは過剰なまでの誇張表現により荒唐無稽な内容を、いたって真実であるかのように語る話である（Brown 10）。ついで、聞き手は、相手の話を実話として受け止めるかに見える姿勢を示さねばならない（11）。話の信憑性をあからさまに疑ったり、からかったりするのではトール・テールは成立しない（同上）。さらに、聞き手は一応まともに話に耳を傾けるが、決して真に受けて心底から驚いたり、または怒ったりなどしてはならない。こうした反応を示す者は、トール・テールの約束事を理解しない者であり、話者にとってはよそ者となる（Wonham 288-90）。えてしてトール・テールでからかわれるのは、他所の土地からやってきた新参者であり、トール・テールは共同体の価値観を共有するか否か

を問う機能も果たす。仲間か、よそ者かを区別する働きがある。

逆にいえば、トール・テールは仲間意識を高め、維持する装置であり、仲間うちの世界の自画像を誇示することも、仲間の自己同一化を確たるものにする方策なのである (Brown 34)。だが、ここでいう仲間もしくはグループとは決して閉鎖的なものではなく、それまでよそ者だった人間を仲間と認めるためにも役立つ (35)。

トール・テールが仲間意識を確認するための社交的機能を果たす様子については、ジョン・グールド『ファーマー、妻を娶る』(John Gould, *Farmer Takes a Wife*, 1940) が好例である。舞台はメイン州、地元農夫の主人公は他州出身の妻を迎える。自宅には村の仲間が来て時候のあいさつ代わりに交わすのがトール・テールであるが、妻はその手の話が洗練された社交術であることをまだ知らない。交わす話の内容もさることながら、妻と夫との反応の違いがまた可笑しい。

あるとき友人が自宅に訪れ、「牧草地でウミヘビを捕まえたよ (Got a sea serpent in my pasture)」(83)、などと話し出す。海からは遠く隔たった土地である。妻は信じられず疑念を表そうとするが、夫には、友人が雨続きの天候の悪さを誇張していることが即座に分かる。そこですかさずヘビの大きさを尋ねると、友人は、「大きさはたいしたことない」、と軽く受け流しつつ、「だが引き潮になるとヘビが果樹園に這ってきて、牡蠣を掘り出して帰っていった」(同上)、などと言っている。

この話に語り手は、メイン州でのトール・テールのやり取りがどのような心理でなされるかを説く。つまり、このような「ウソ」は、悪天候といった陳腐な出来事を忘れがたいものにするのであって、法的に罰されるような虚偽とは無縁である。仲間内では、この友人がウソを言い触らしているとは誰も思わない。むしろ、話者は「真理を述べるのにトール・テールがもっとも粹な伝え方であることを熟知している (He lies because it's

the most artistic way he knows of to tell the truth)」（83）から、安心してホラを吹く。仲間はこの手の話を事もなく額面より割り引いて処理するのであり、これは文学的な慰みに等しい。たとえるなら、「ひとつの思念をソネットに当てはめるような頭の体操である（an intellectual exercise like fitting a complete thought into the structure of a sonnet）」（同上）、というのである。「ただし、まともにソネットを作ることは頭の疲れることで、私たちは好んで疲れることをしない（except that we folks don't wind up in such a welter of mental fatigue as is suggested by most sonnet）」（同上）、とオチまで付く。

トール・テールは単調になりがちな日常への活力剤であり、仲間内の潤滑油でもある。生活を明るくするのは、「良くできた健全な」語り／騙りであり、そこには「他国の人には分からない」心の安らぎがある。妻も土地の人々になじんでくると、この手の話が平気になる。別の友人が、飼育する雌鶏についてホラを吹くと、妻はすかさず、「お宅の鶏はグレープ・フルーツぐらいの卵を産んだそうね（I hear your hens lay eggs as big as grapefruit?）」（84）、と聞き返すまでになる。友人も応えて、「それを産んだのは雌鶏じゃなく鳩のほうだよ（No, that ain't so—but my pigeons do）」（同上）、と返してくれる。

他方、『ウォールデン』に登場する聞き手は、トール・テールの聞き手足りえない人々が目立つ。「訪問者たち」の章に登場するカナダ人の樵は、「一日中だっじゃべってられる」（267）とソローに述べるほど会話を愉しむし、樵は強靱な生命力と体格とからポール・バニヤンを彷彿とさせることもなくはない。しかし、樵はいたって素朴で天然無垢な人間のあり方をソローに投げかけこそすれ、トール・トークを語るわけではない。「バイカー農場」の章では、肉も食わず、コーヒーなど嗜好品を必要としないといったソローの話をアイルランド移民のフィールド一家が聞くのだ

が、フィールド一家はソローに距離を置いたままである。「孤独」の章でも、「寂しいでしょうね」と聞く人に、天体の壮大な比喩を用いたトール・トークがあるが、聞き手の反応は啞然としたもので、話の調子に合わせるわけではない。「隣人を目覚めさせるためだけでも」語るトール・トークだが、こうしたトール・トークのユーモアに調子を合わせて読み進み、その滑稽さを理解し、さらには誇張を許容する読者こそが隣人足りうるであろう。

すると、辛口のようなのだが、トール・トークの約束事に沿った社会批判として容認しうるのがソローの論調と考えられまいか。食事百回を五回に減らせ、または年長者の発言で傾聴に値するものなど聞いたことがない、などの言いぐさは、だれが読んでも大げさであり、文字通り受け取る心配がない。とって、大げさであるがまったくのほら話ではない。トール・テールの調子で、大仰な表現を繰り返して、罵倒しているようで、読者はあくまで約束事の範囲での痛罵として許容する。別の言い方をすれば、ソローの論調は、辛辣な時ほど、読者が約束事を了解することを欲する。口調が辛いほど、それだけ交際を求めている、と見ることもできよう。

代表的なトール・テールが南西部に生まれたことは否定しないまでも、アメリカ東部の文学にもトール・テールの要素を見逃すのは、アメリカ文学の特質のひとつを見失うことになる。ソローのウィットやユーモアに関する論考は決して少なくはない。しかし、多岐に亘るユーモアの分析でもソローの誇張した物言いをソローのトール・トークとして捉える研究はこれまで十分になされていないようである。一方でアメリカのトール・テールについての研究があり、他方でソローのユーモア論も連綿と語り継がれながら、これらを結び付けて、19世紀アメリカの東部と南西部とのダイナミックな関係において東部文学を捉える試みがなされてこなかったのは惜しいことである。

大陸横断鉄道が完成するのは1869年のことであるが、『ウォールデン』はアメリカ全土の鉄道網が建設中に構想され、ウォールデン湖畔、ソローの建てた小屋にも新設のフィッチバーグ鉄道が隣接していたのである。電信が西部のニュースを送ってくることも『ウォールデン』には言及がある。当時の最先端技術がアメリカ南西部の開拓者精神を東部のピューリタンの社会と結びつけていたと見做すこともできよう。まさに『ウォールデン』の快活な批判精神とそれを発揮するトール・トークとは、東部・南西部の垣根を越えたアメリカ文学の台頭を証左するものであろう。

註

- 1 引用は飯田実訳、岩波文庫版（1995年）によるが、一部は必要に応じ筆者が表記を換えた。岩波文庫版の邦題は『森の生活（ウォールデン）』である。これは日本の読者に分かり易からうとの配慮から従来原典とは主題と副題が敢えて逆にしてある。本論では、原題の通り『ウォールデン』と表記する。ページ数も岩波文庫版、上巻のものである。必要に応じ、括弧書で原典の表記を添える。原典からの引用はWilliam Rossi編ノートン版から行う。
- 2 Esther Shephard, "Paul's Cradle." *Paul Bunyan*. 1924. Odyssey Classics ed. Orlando, FL: Harcourt, 2006. 1-12.
- 3 Kenneth S. Lynn, ed., *The Comic Tradition in America: An Anthology of American Humor*, New York: Norton, 1958.
- 4 Richard Prud'Homme, "Walden's Economy of Living," *Raritan* 20.3 (Winter 2001): 107-31. Esp. 107-12.

Bibliography

- Alcott, Amos Bronson. "The Forester." *Atlantic Monthly* X (April, 1862): 443-45.
- Beardsley, George. "Thoreau as a Humorist." *The Dial* XXVIII (January 1 - June 16, 1900): 241-43.
- Blair, Walter. *Native American Humor*. 1937. San Francisco: Chandler, 1960.

- Browner, James Paul. "Thoreau as Wit and Humorist." *South Atlantic Quarterly* XLIV (April, 1945): 170-76.
- Brown, Carolyn S. *The Tall Tale in American Folklore and Literature*. Knoxville, TN: U of Tennessee P, 1987.
- Cox, James M. "Humor and America: The Southwestern Bear Hunt, Mrs. Stowe, and Mark Twain." *Sewanee Review* LXXXIII (Fall, 1975): 573-601.
- Emerson, Ralph Waldo. "Thoreau." *The Portable Emerson*. New Ed. Ed. Carl Bode. New York: Penguin, 1984. 573-93.
- Gould, John. *Farmer Takes a Wife*. New York: Morrow, 1945.
- Grobman, Neil R. "The Tall Tale Telling Events in Melville's 'Moby-Dick'." *Journal of the Folklore Institute* 12.1 (1975): 19-27.
- Gruenert, Charles. *Thoreau's Humor in Theory and Practice*. Ph.D diss. U of Chicago, 1957.
- Halbert, Janet Claire Mason. "Humor in *Walden*." MA. Thesis. Texas Tech U. August, 1972.
- Loomis, C. Grant. "A Tall Tale Miscellany, 1830-1866." *Western Folklore* 6.1 (Jan. 1947): 28-41.
- . "Henry David Thoreau as Folklorist." *Western Folklore* 16. 2 (April, 1957): 90-106.
- Lowell, James Russell. "Thoreau." *North American Review* CI (October, 1865): 597-608.
- Lynn, Kenneth S., ed. *The Comic Tradition in America*. 1958. New York: Norton, 1968.
- . *Mark Twain and Southwestern Humor*. 1959. New ed. Westport, CT: Greenwood, 1972.
- Melville, Herman. "Cock-A-Doodle-Doo! or the Crowing of the Noble Cock Beneventano." Rpt. in Lynn, *The Comic Tradition in America*. 235-60.
- . "Israel is Initiated into the Mysteries of Lodging in the Latin Quarter." in *Israel Potter*. Chapter IX. Rpt. in Lynn, *The Comic Tradition in America*. 261-67.
- Mogan, Joseph J., Jr. "Thoreau's Style in 'Walden.'" *Emerson Society Quarterly* 50 (I Quarter, 1968): Supplement, 1-5.
- Moldenhauer, Joseph J. "The Rhetorical Function of Proverbs in 'Walden.'" *Journal of American Folklore* LXXX (April - June, 1967): 151-59.
- Pulsifer, Harold Trowbridge. "Farmer Takes a Wife. By John Gould." *The New England Quarterly* 19.2 (June 1946): 270-72.

- Rourke, Constance. *American Humor: A Study of the National Character*. 1931. Rpt. ed. New York: NYRB Classics, 1994.
- Schmitz, Neil. "Tall Tale, Tall Talk: Pursuing the Lie in Jacksonian Literature." *American Literature* 48. 4 (Jan. 1977): 471-91.
- Shephard, Esther. *Paul Bunyan*. 1924. Odyssey Classics ed. Orlando, FL: Harcourt, 2006.
- Skwire, David. "A Checklist of Wordplays in *Walden*." *American Literature* XXXI (November, 1959): 282-89.
- Taylor, J. Golden. *Neighbor Thoreau's Critical Humor*. Logan, Utah: Utah State U. Monograph Series, VI. January, 1958.
- Thoreau, Henry David. *Walden and Resistance to Civil Government: Authoritative Texts, Thoreau's Journal, Reviews and Essays in Criticism*. 2nd ed. Ed. William Rossi. New York: W. W. Norton, 1992.
- Twain, Mark. "How to Tell a Story." 1895. *Tales, Speeches, Essays, and Sketches*. Ed., and Intr. Tom Quirk. New York: Penguin, 1994. 391-96.
- . *Roughing It*. 1872. Eds. Harriet Elinor Smith, and Edgar Marquess Branch. Berkeley and Los Angeles: U of California P, 1995.
- West, Michael D. "Reclaiming Thoreau's Humor for the Classroom." in *Approaches to Teaching Thoreau's Walden and Other Works*. Ed. Richard J. Schneider. New York: MLA, 1996. 91-97.
- 絳川羔「*Walden*における Thoreau のユーモア (I)」『青山学院大学文学部紀要』12号 (1969年)、1-15頁。
- 。「*Walden*における Thoreau のユーモア (II)」『英文学思潮』42号 (1969年)、117-32頁。
- 。「*Walden*における Thoreau のユーモア (III)」『青山学院大学一般教育部論集』11号 (1970年)、73-80頁。
- ソロー、H. D. 『森の生活 (ウォールデン)』上・下巻 (飯田実訳)、岩波書店、1995年。